

## コロナ禍での対面開催となったCES2022

### ◆CES2022が米ラスベガスにおいて対面形式で開催された

2022年1月5日～7日にラスベガスでCES2022が、対面とオンラインを交えたハイブリッド形式で開催された。21年はコロナの影響でオンラインのみであったが、「偶然の出会いがなくなった」との声は多く、2年ぶりに会場展示を復活させた。直前の「オミクロン変異株」感染拡大の影響で、多くの企業が出展の取りやめやオンライン参加に切り替えた。また、日程も1日短縮となった。

全世界から参加者の集まるCESならではの新しい感染拡大防止策が導入された。マスク着用の義務や手指消毒、講演時の椅子間隔や通路の幅を広げるなどの基本的な対策に加え、検査キットやマスク、握手の意思を示すシールの配布を行った。緑、黄、赤の3色の丸シールはそれぞれ、握手に抵抗のない人が緑、「グータッチ」の希望が黄、触れ合いを控えたい人は赤を示し、入場証に添付して意思表示をする仕組みを取り入れた。

出展企業数は、約800社のスタートアップを含め2,300社以上で、車両技術、人工知能、デジタルヘルス、スマートホームなどの最新の技術に加え、非代替性トークン<sup>1</sup>、フードテック、スペーステックなどの新カテゴリーが加わった。

### ◆ソニーグループはSUVタイプの新型試作車両VISION-S 02を発表

今回のCES2022では、脱炭素の流れもあり、EV化やモビリティの自動運転技術に関わる展示が増えた。ソニーグループは、モビリティ進化への貢献を目指した取り組みである「VISION-S」の、新しいSUVタイプの試作車両を出展した。また、これに合わせ、モビリティ体験の進化や提案を今後さらに加速させるため、22年春に事業会社「ソニーモビリティ株式会社」を設立し、本格的にEVを市場に投入することを発表した。新会社はAI・ロボティクス技術を最大限活用し、誰もが日常的にロボットと共存する世界の実現と、社会への貢献を目指す。エンタテインメントロボットのaibo、ドローンのAirpeak、さらにモビリティの進化へと貢献す

<sup>1</sup> 非代替性トークン(NFTs)：ブロックチェーン上に記録される一意で代替不可能なデータ単位。

るVISION-Sを加え、さまざまな領域において新しい価値創造を目指す。

### ◆CESで初めて自動運転車レースが開催された

自動運転車のレースがラスベガス・モーター・スピードウェーで開催された。レースには米国に加えてドイツやイタリア、韓国などの大学で構成する5つのチームが参加し、高速に走行する車両を制御する自動運転ソフトの性能を競った。F1より一回り小さいレーシングカーを自動運転ができるように改造し、無人ながらも時速240キロメートルを超えるスピードで自動走行の性能を競い合った。イタリアのミラノ工科大学と米アラバマ大学の合同チーム「PoLiMOVE」が、CESレースの初代優勝者となった。

### ◆ベストオブイノベーションアワードを日本のWHILLが受賞

CESはベンチャーを育てる取り組みも運営しており、スタートアップ企業限定の出展ブース「Eureka」で披露された。また、日本もJETROが「J-Startup」パビリオンを設置し、日本のスタートアップ52社をサポートした。CES主催者が選択するイノベーションアワードの授賞式も開催され、22年は日本のスタートアップ企業の受賞数も増えた。採血なしに血糖値を測れるセンサーを開発した「クオンタムオペレーション」や「ライトタッチテクノロジー」、小型軽量のVR端末「MeganeX」などを開発した「Shiftall」が受賞した。

アクセシビリティのカテゴリーでは、日本のWHILLの「WHILL Model F」がベストオブイノベーションアワードを受賞した。高齢者や歩行困難な人を含むすべての人のための折りたたみ式の電動車椅子である。Model Fは、日常使用のアクティブなライフスタイルに適合するように設計されている。

軽量で折りたたみ式なので、車への積み込みが簡単で、飛行機での移動にも便利である（図.1）。WHILLスマートフォンアプリを使用すると、リモートでModel Fの運転やロックができ、総走行距離やバッテリーレベルなどの主要なデバイス情報の確認もできる。日本では21年11月より販売やレンタルのサービスを開始しており、北米では今春から市場投入する予定である。

革新的技術には、対面でのプレゼンができる展示会が重要である。【成田誠】



図.1 WHILL Model F  
出典：https://whill.inc/jp/model-f